

作品発表

「心を浮かべて2010」

With Mind Released

林 亨

北翔大学 生涯学習システム学部 芸術メディア学科

今回掲載した作品写真は、2010年10月4日から9日まで、東京都中央区京橋にあるアトスペース羅針盤で行われた企画展「羅針盤セレクション展」の展示風景である。中央の矩形キャンバスは、縦横の比が1:2のM120号キャンバスを横位置に2枚つなげたものである。そこからはみ出すように配置したパーツはキャンバスに描画してからカットしたものだ。一昨年からはじめたシリーズ「心を浮かべて」のインスタレーション作品4作目である。

今回の作品の特徴は、図として見える白い形体が正円に近い形に変化したことと、キャンバスサイズが横長になり、これまでの既製のキャンバスサイズでは表せなかった空間感を出していることである。そこで、改めて、矩形キャンバスとそこからはみ出る形体の関係を考えながら作品の意図のようなものを述べてみる。

もともと、キャンバスからはみ出したパーツを採用したのは、イリュージョンの誇張やイメージの複層化が理由であるが、そのためには、キャンバスの地と図の関係を自由に、あるいは無意識に反転させたり往復したりするような仕掛けをつくりたかった。そこで、同一平面上にとどまればトリッキーな描画法を駆使しなければならない恐れがあったため、キャンバスだけでなく、キャンバスが掛けられた壁を活用することにした。単に物理的な段差を利用したかったとか、平面上の枠の内外の差異を利用するというのではなく、作品の内容には直接的には関係のない壁との間に新たな物語や次元が作れないかと考えたのである。言い換えれば、「絵画の外」という概念を取り込み、「絵画の外」にある自由な空間性と時間性を掘り起こし、作品に取り込みたかったのである。

丸い形は、前シリーズ「眼を閉じて」でサブタイトルにも含めた「たおやかさのかたち」の一つの答えといえなくもないが、単に自分の心を客体化するとか客観視すると言うような単純な発想はない。あるいは第3者の心を象徴的に並べたわけでもない。丸い形を誰かの心の形象化と見るならば、もっと形の内側に描き込みを入れるだろう。今回の形体は、鉛筆と絵筆によるドローイングの繰り返しによってつくられている。投げ所のキーワー

ドとして「たおやかさ」というものがあるが、具体的な物体を思い描いてドローイングしているわけではない。描かれた形体は、描き込んで形をクリアにする度に、色を塗ってそれを消すように形を整えるというようなプロセスを何度も繰り返して表された。デッサンやドローイングの制作中は顕著に実感するが、画面に施した軌跡はいくら消してもその上描きに影響する。線の持つ喚起力と多義性は、そうして生まれると思われる。そのようにして生まれた丸い形体は、何かを具体的に表すというよりは、実は、「窓」のような境界線ではないかと考えている。何年か前に制作した波板シリーズで、カットされた帯状の細長いシートを輪の状態にして展示したことがある。それは、一種の欠落の境界線であり、入り口であり出口でもある作品だった。キャンバスをはみ出て、壁に貼り付けられた丸いキャンバス布は、その時点で丸い形以外の空間を、キャンバスを展示する壁から違う次元の空間へと変質させる。そこに時間差をつくり、キャンバスと壁の関係性に時間的な流れと遠近感を作り出したかった。

もちろん、絵画自体が窓として概念化された時代がある。とくに遠近法が整備された時点では、窓としての機能は重宝された。しかし、その当時の窓の役割を演じた矩形キャンバスは、今回の作品においては、窓ではなく、窓の外と内を切り替えるスイッチのような役割を持っている。

「心を浮かべて」というタイトルでつくっているシリーズ作品は、心の進化論といえる言説に出会ったことから始まった。そのことは本誌2号における作品発表に添付した制作ノートに記している。簡単に言うと、「心」の存在が大きくなるにつれて、「心」を使った漢字が増え、言葉も増えた。そこから、概念の気づきともいえるべき現象を考えることになったということであった。それは、言葉に出来ない感情や思いが、呼応する言葉を持つことによって明瞭に認識される現象と同様である。誰でもそういう経験があるだろう。視覚芸術としての絵画では、平面上に表された何らかの形と色が作り出すイメージによって、同様な現象を呼び起こすことが出来る。しかも、言葉よりも共感性が高い。

言葉も、一種の窓と考えられる。しかも、窓の向こうは見るものによって変化し遠近感も違う。ものの概念が先にあり、それに命名されたのではなく、言語化しながら概念が切り取られてきたように、言語が領域を設定する以前にも、おそらく何かしら区切る物差しのようなものがあつたに違いなく、その物差しは窓とっていい。要するに、今回の作品は、そのような物差しを表す作品になればと考えている。そして、その先には、初めから人間にあつたと思われている「心」の後進性についての問題意識を喚起する装置を作りたいと目論んでいるのである。

心を浮かべて With Mind Released

林 亨

HAYASHI Toru



心を浮かべて 綿キャンバス・アクリル・墨など 150cm×500cm 2010年